

「米朝首脳会談」

2018年06月16日

米国のトランプ大統領と北朝鮮の金正恩委員長の歴史的な首脳会談が12日、シンガポールで、実現した。両首脳は、北朝鮮の体制保証と朝鮮半島の非核化とに合意し、署名した。合意は包括的で、今後の話し合いで実質化するとのことらしい。合意文書には、「完全な非核化」の文言はあるが、大事な「検証可能」と「不可逆的」はない。トランプ大統領の中間選挙目当ての興行ショーであったと酷評する向きもあるが、両首脳が顔と顔を合わせて話し合い、戦争を回避できたことは、まずは喜ばしい。今回の会談を出発点にして、朝鮮半島から核を廃棄し、「休戦協定」から「平和協定」に進むことを期待したい。

北朝鮮の正式名は「朝鮮民主主義人民共和国」である。しかし、人民にとって「民主主義」でも「共和」でもなく、「金王朝」の意に反する者を収容所に送り込み、公衆の面前で肅清し、恐怖の独裁国家である。国民は、金委員長を賛美する言葉しか持っていない。日本は戦前、天皇を「現人神」として、国民は天皇のために死ぬことを至上の価値とする「臣民」であった。北朝鮮の国民の悲劇と忍耐を理解できるのは日本である。イランとリビアは核兵器を持たなかったために滅ぼされ、指導者たちは殺害された。北朝鮮は「金王朝」を守るために核とミサイル製造に国力の大半を費やし、国民の多くは極貧に喘いでいる。北朝鮮の国家予算は、茨城県の県予算と同等で、日本の予算の1万分の1くらいである。米国は日本の4、5倍であるから、北朝鮮と米国の国力の差は天と地ほどである。最貧国と最富国の首脳会談であったが、全く対等で、世界中が注目する会談になった。核とミサイルのお陰であるが、金委員長の主権国家としての気迫に驚き入る。

日本は主権国家としての誇りは微塵もない。政治学者の白井聡氏が『永続敗戦論』、続いて、『国体論 菊と星条旗』を上梓した。戦前の国体は「天皇・菊」であった。ポツダム宣言の受諾に関し、国体護持（天皇と天皇制）が保証されるかが問題であった。戦後の国体は「米国・星条旗」になった。パックス・アメリカナが八紘一宇として捉えられ、日本人は奴隷であることを否認する本物の奴隷になっている。白井氏は、その先は、戦前同様の破滅しかないと書いている。戦後の自民党政治は米国追従に終始し、安倍晋三首相は「米国と100%共にある」が口ぐせで、無批判な従属である。憲法より日米安保条約が上位にあり、沖縄の現状、地位協定を見れば、米国の言いなりで、日本は主権国家とはとても言えない。安倍首相は、トランプ大統領が首脳会談の「中止」を語った時、真っ先に大統領支持のコメントを出した。このコメントを、朝鮮半島に緊張があれば、憲法改定、軍事力強化策を進められることを期待する言葉として聞いたのは私だけではないだろう。ところが、トランプ大統領が「最大の圧力」という言葉は使わないと発言したら、安倍首相は、圧力一辺倒から、「日朝平壤宣言」に基づいて話し合いをすと言い出した。拉致問題を米国に依頼するなど、主権国家としての矜持は見られない。

金委員長の独裁制には、嫌悪以外にないが、主権国家の誇りを持って米国と対等に渡り合う姿勢には感心する。国家主権を尊重する現代世界において、国の安全を他国に保証されることなどは理解し難い。また、核保有国が他国に「核を放棄せよ」などと強要することは理に合わない。過去の世界は、むき出しの暴力が支配していたが、現在も、強国が小国を支配する野蛮な時代から抜け出していない訳である。いずれにしても、朝鮮半島から核が廃棄され、北東アジアに平和が実現し、そして、北朝鮮の国民の命と生活を守る政策を実行してほしい。超大国を誇る米国らしい、底力を見せてもらいたいものである。